

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学

所属 保健医療学部リハビリテーション学科

名前 大村優慈

作成日 2024年8月1日

1. 教育の責任

湘南医療大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻において以下の必修科目を担当している。

1年次:理学療法教養基礎、見学実習

2年次:運動学演習

3年次:義肢装具学Ⅱ、神経系理学療法学演習、クリニカルリーズニング論、理学療法特論Ⅰ、理学療法研究法演習、評価学実習

4年次:理学療法卒業研究、総合臨床実習、チーム医療論

義肢装具学Ⅱと神経系理学療法学演習は科目責任者であり、全15回の授業を担当している。その他の科目はオムニバス科目であり、他の教員と連携して担当している。また、3年次の日常生活活動学演習、老年期理学療法学の実技演習の補助、脳血管障害分野の国家試験対策特別講義も担っている。

さらに、1年生のチューターリーダー、教務委員、国家試験対策委員のメンバーとしても活動している。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

理学療法士を養成する大学教員としての私の教育理念は、以下の①～④の4点に集約することができる。

- ① 学生に対して敬意をもって接すること
- ② 学生自身の興味や意欲を尊重すること
- ③ 学生自身が自ら学ぶ力を育てること
- ④ 学習面や性格面で問題を抱えている学生の将来性を低く見積もらないこと

具体的には、学生に対して決して横柄な態度をとらず、敬語を用いて丁寧に接すること、学生とのコミュニケーションが教員から学生に向けての一方通行にならないようにすること、学生自身が問題意識を持ってものごとを調べ、自らの頭で考え、その考えを様々な形で表出して他者と共有し、議論することを授業の中で求めること、すなわち発問、グループ学習、調べ学習といった、アクティブラーニングの要素を積極的に授業に取り入れること、在学中に学習面や性格面で問題を抱えている学生に対しても、その学生が有する将来性に学生本人以上に強く期待して、絶えず励まし続けるということを心がけている。

2) 理念をもつに至った背景

私がこれまでの自身が理学療法士養成校で教育してきた教え子の中には、在学中には決して優等生とはいえない状況であったにもかかわらず、卒後に社会で大きな活躍をみせている者もみられている。学生は若く、学修途上の状況にあるため、知識・技術・態度面において未成熟である。目の前にいる未成熟な学生の欠点だけを見て、その学生

の将来性まで低く見積もってしまうことは、決してしてはならないと考えている。私がこれまで出会ってきた理学療法士の中には、学生時代に成績不良による留年や国家試験不合格を経験したものの、その後の努力によって、現在は大学の教授や病院のリハビリテーション部長を務めている者が何名もいる。このような経験から、たとえ学習面や性格面で問題を抱えている学生であっても、将来的に社会で大きく飛躍する可能性を有しており、決して軽んじることなく、敬意をもって接するべきであると考えようになった。学生の飛躍のためには、単に知識と技術を一方的に伝える教育ではなく、学生の興味や意欲を高めることや、学生が卒後にも自ら学ぶ力を育てることが極めて重要である。そのため、私はアクティブラーニングを積極的に取り入れた教育を展開するようにしている。

3. 教育の方法・戦略

国家試験や臨床現場において重要な内容を、学生が身体を通した実体験も交えながら、わかりやすく伝え、さらに学生の学習意欲や集中力を高めるための工夫や、能動的活動の促進を心がけている。具体的な内容は以下の通りである。

① 身体を通した学習

学生にスライド(視覚)と講義(聴覚)で一方的に情報を与えるだけでなく、学生が杖、装具、車いすなど、実際の物品に触れ(触覚)、なおかつその部品の調整を実際に行うこと(運動覚)を通して、臨床実践力を養成するとともに、記憶に定着しやすくなるようにこころがけている。

また、実技の授業を行う際には、必ず正しい方法と誤った方法をともに提示し、その理由について説明することに加え、実際に学生に両方の方法を実施、体験してもらい、自身の身体で体感した違いについて自分の言葉で記述するように求めている。

② グループワークの活用

模擬症例を用いたグループでの症例検討を授業に積極的に取り込み、学生が必要な情報を自ら調べ、自らの頭で考え、グループ内で話し合い、成果をプレゼンテーションすることで共有し、さらに議論を行う場を設けている。

③ わかりやすいスライドの作成

スライドに使用する文字のフォントサイズは 20 以上とし、写真やイラストを多く用いることで、見やすくわかりやすいスライドになるようにしている。

④ レジュメの穴埋め

授業で使用するレジュメにおいて、重要語句は穴埋め式とすることで、学生の集中力の維持につなげている。

⑤ 小テストの実施

学生の緊張感の維持、自身の学習状況の確認のために、小テストを実施している。

⑥ カラーマーカーを用いたワークの導入

多くの学生が苦手とする脳解剖、脳画像の理解度向上のために、脳 MRI 上にカラーマーカーで神経線維や神経核、脳領域を描きこむ演習を行っている。学生の緊張感の維持、自身

の学習状況の確認のために、小テストを実施している。

⑦ 夏季休暇中の課題の提示

3年後期「神経系理学療法学演習」の授業理解度向上に向けて、3年生の夏季休暇中に取り組む神経機能解剖学に関する課題を提供している。

⑧ 成績評価方法の工夫

単に知識や技術を修得することを教育の目的とせず、授業時間内におけるルールへの遵守、意欲を持って積極的に取り組む姿勢といった、医療人に求められる姿勢についてもその重要性について学生に説明するとともに、成績評価に組み込んでいる。

4. 学習成果

2023年度の「義肢装具学Ⅱ」の授業評価において、意欲は学科平均4.54に対して4.49と低かったが、その他の項目は学科平均を上回った。特に、熱意は学科平均4.60に対して4.81、コミュニケーションは学科平均4.38に対して4.57と高かった。

2023年度の「神経系理学療法学演習」の授業評価において、学科平均よりも0.1以上高かった項目は、熱意(学科平均4.67に対して4.87)、教え方(学科平均4.54に対して4.65)であった。低かった項目は意欲(学科平均4.61に対して4.45)、理解(学科平均4.44に対し4.26)、向上(学科平均4.57に対し4.45)、環境(学科平均4.56に対し4.39)であった。

学生の学修意欲を十分に引き出しきれていない面があるため、今後は授業科目で学ぶ内容がどれほど理学療法士にとって重要なのかを、熱意だけでなく、より説得力のある伝え方ができるように努力していきたい。

5. 改善のための努力

教育の改善のための努力として、以下の①～③が挙げられる。

① 自身の専門領域(教育学、教育方法論を含む)の知識と技術の向上

書籍および学術論文からの情報収集、研究会への参加、学会参加、研究活動、外部の研究者、臨床家、企業の方々との交流を通して自身の専門領域の知識と技術を向上させる。

② 学生との積極的な交流

授業に限らず、学生との面談や行事等でも積極的に交流を持ち、学生の学習意欲の向上につなげる。

③ 学生からの授業評価に基づいた授業改善の繰り返し

学生からの授業評価の結果を真摯に受け止めて、授業改善につなげる。

6. 今後の目標

短期目標:科目責任者を務める「義肢装具学Ⅱ:3年前期」、「神経系理学療法学演習:3年後期」の授業評価における全評価項目で学科平均以上の評価を得る(後期科目は半年後、前期科目は1年後)。

長期目標:「大村先生の授業を受けたことで、中枢神経系領域の理学療法についてもっと勉強したいと思いました。」といった声を、毎年学生から得られる教員になる。また、わが国の中枢神経系の理学療法分野をリードする人材を輩出する。